

正月のお茶の間はサッカーやラグビー、駅伝などスポーツ三昧(さんまい)である。今や日本の正月の風物詩ともいえるこれらスポーツイベントを毎年見るたびに、新しい年のスタートを実感するのである。

今年の日本スポーツ界はいろいろな意味でリスタートの年になるであろう。オリンピック、サッカーW杯招致ともに残念な結果となったが、仕切り直し(リスタート)の年となる。また日本のスポーツ政策においては、総合型地域スポーツクラブの設置期限が2010年までであるため、昨年夏に発表されたスポーツ立

SPORTS MUST CHANGE

谷塚 哲



国戦略を軸に新しい日本のスポーツ政策が展開(リスタート)されるであろう。さらに企業スポーツの休廃部やスポンサーの撤退など近年、右往左往したプロ・トップスポーツ界は、企業依存型からの脱却(リスタ

葉がスポーツ現場から最近、聞こえてくる。確かに自主自立のクラブ経営を目指すなら月額300円の会費では、会員数が圧倒的に多くない限り、決して楽な経営とは言えないだろう。経営理論からすれば、単価

いのが現状である。今の日本スポーツ界は過渡期にある。ボランティアを中心として発展してきた従来の日本のスポーツ観と、諸外国のスポーツマネジメントなどを取り入れた新しい日本のスポーツ観。

べきものはしっかりと傳承し、さらに新しいものを取り入れて、より良いものを作り出していくことこそが本来、リスタートには欠かせないのである。それができて初めて日本のスポーツ文化と言えるだろう。

リスタートの年

ート)も当面の課題である。そして何よりも私たち自身のスポーツ観もリスタートしていかなければならないのである。

を上げて質の良い指導者を雇用し、それが会員サービスの向上につながり、結果収益増となる。こう考えるのは正論である。しかし、

そのどちらが正解というわけではないが、時に新旧スポーツ観が悪い方向で衝突していることもある。リスタートとは決して

口からのスタートを言っているのではない。古いものでも良いもの、残していく

「月額300円の会費では、クラブの経営なんてできないよ」。こういった言

が今の日本スポーツ界ではなかなか理解してもらえな

でも良いもの、残していく

事業組合代表) REGISTA 有限責任 隔週土曜日掲載